

Title	現在日本宗教における女性リーダーシップ：真如苑の事例から
Author(s)	カヴァリエレ, パオラ
Citation	大阪大学大学院人間科学研究科紀要. 44 P.317-P.331
Issue Date	2018-02-28
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/68304
DOI	10.18910/68304
rights	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<http://ir.library.osaka-u.ac.jp/dspace/>

現在日本宗教における女性リーダーシップ

—真如苑の事例から—

カヴァリエレ・パオラ

目次

1. はじめに
2. 教主夫婦から「継主さま」への真如苑の継承
3. 「継主さま」伊藤真聰のカリスマ性
4. 真如苑の中央カリスマ・カリスマ的組織
5. 信仰教団に内在している霊能者組織の機能
6. 経親組織と霊能者組織に基づくリーダーシップ
7. 真如苑の女性指導者のリーダーシップ
8. おわりに

現在日本宗教における女性リーダーシップ —真如苑の事例から—

カヴァリエレ・パオラ

1. はじめに

本稿は現在の日本宗教団体における女性の宗教指導者を主題として取り上げ、「カリスマ関係」という現象の組織的、社会的、文化的要素について考察を行う。ケーススタディーとして真如苑（しんにょえん）の現在の女性指導者である伊藤真聰（いとう・しんそう）を取り上げ、カリスマ的指導ないしカリスマ関係というものをカリスマ論¹⁾（ウェーバー 1921-22 = 1960 と 1921-22 = 1970）とエツィオーニの組織論（Etzioni 1961 と 1964）の理論的視点から検討する。筆者が注目したいことは、現在の真如苑の女性指導者が、特殊能力に依拠するのではなく、カリスマ的従属関係の成立過程とその成立と存続を可能にする集団・組織の構造、およびそうした構造の背後の服従関係（コンプライアンス）と文化的な価値体系（Etzioni 1961 : 231 - 54）に依拠する点である。本稿は 2002 年~2004 年、2010 年~2011 年、そして 2015 年~2017 年に行ったフィールドワークで得たデータ分析に基づいている。

2. 教主夫婦から「継主さま」への真如苑の継承

真如苑は、伊藤真乗（しんじょう）と友司（ともじ）夫妻が、1936 年に東京都立川市で始めた大般涅槃教（だいはつねはんきょう）を所与の教典とする仏教教団である。1967 年に友司の死を経て、1970 年頃より急成長をした。現在の信者数は約 92 万人程度（文化庁 2017:71）とされている。1989 年に真乗が他界し、カリスマ的開祖・最高指導者であった伊藤夫妻の没後に、真如苑の教団指導を継承したのは夫妻の二人の娘であった。二人のうち夫婦の四女にあたる伊藤真聰（1942 ~）は、現在の最高指導者である。第二世代へと継承された教団は、教祖の伊藤夫妻が内在していた特殊能力、教団創立当初のカリスマ的支配を終えて、新しい時代に入った²⁾。この 1970 年代以降の真如苑の急成長は、新たに形成された女性によるリーダーシップと関係があると考えられる。本稿ではそのことを明らかにするため、現在の女性指導者である伊藤真聰の最高指導者としてのカリスマ性とそのカリスマ的教団の組織と仕組みの関わりについて検討する。具体的には、彼女はどのようなリーダーシップをもっているのか、リーダーと帰依者の間にはど

のような交流、関係があるのか、そしてそれはどのような方法と経路で、大衆により帰依・承認されているのか、さらに信者間には、どのような組織が存在しているのか、といった事柄を取り上げる。

現在の真如苑のような大規模な教団が女性指導者と帰依者の間にカリスマ関係を維持していくためには、「特定の目的の達成するため意図的に構成および再構成された社会単位(人間集団)」(Etzioni 1964:3)に基づく最高指導者のカリスマ性による特別な組織的仕組みを必要とするであろう。カリスマ性による組織的仕組みは効果的に機能する「導き」³⁾ 系統に基づく「経親」⁴⁾ (すじおや) 組織を形成し、それによって集権化と集団結束を強化する仕組みをもった信仰共同体を成立させる。そして密教系教団である真如苑では、閉鎖的な連鎖も形成されている。そのため、指導者・部会・連合会・経親・導き親・導きの子・導きの孫といった上下の固定関係は、そのまま組織に組み込まれて維持されている。エツィオーニの組織論から解明すると、このような組織の下級参加者が示す服従関係のタイプは道徳的である (Etzioni 1961 : 10 - 1) と言える。

こうした真如苑におけるカリスマの成立・展開ならびに継承は、カリスマ的關係や特殊なヒエラルヒーの指導者系列、規範的組織の仕組み (Etzioni 1961 : 40 - 1) にあてはまると言えるだろう。したがって、本稿では「中央カリスマ・カリスマ的組織」における女性指導者のカリスマ性が成立していく過程、並びに組織そのものに内在しているカリスマ的メカニズムや団体内の服従関係 (コンプライアンス) で育成され認知されていく過程を明らかにしていく。

3. 「継主さま」伊藤真聰のカリスマ性

まず、現在の女性指導者である伊藤真聰が、十分なカリスマ・魅力をもっているのか、また彼女はどのようなリーダーシップをもっているのか、リーダーと帰依者の間にはどのような交流、関係があるのかについて、以下カリスマ論を適用し述べてみたい。

伊藤夫妻のカリスマは、超自然的、超人間的なそれといえる。伊藤真乗と妻の友司の呪術的な力は信者たちに強い影響を与えた (Nagai 1995:303)。この能力は指導者本人に備わっているカリスマであり、指導者の人格の内在の力に依存するようなカリスマであった。Bendix (1966:301) によれば、カリスマとは被支配者が決定と行為に対する自らの基準のあるものを変更させるほどに強い影響を与えるものである。このため Bendix はウェーバーの「カリスマ的権威」より「カリスマ的指導者」という語を好んで用いていた (1966:302)。筆者は、伊藤夫妻のカリスマが Bendix の言うカリスマ的リーダーシップに適合するものと考えられる。

夫妻の後を継いだ伊藤真聰のカリスマは、ウェーバーの定義に当てはめれば「日常化されたカリスマ」ということになる。ウェーバーによると、日常化されたカリスマは官職をあたえられた指導者、あるいは何世代かにわたる世襲によって引き継いでいるよう

な指導者の持つカリスマである (Weber 1922 = 1976:154)。だが信者によれば、伊藤真聰は官職のカリスマだけではなく、人格的なカリスマも身につけている。大祭の祈りなどには、教主の後につづいて信者が必ず「真聰さま！」と名前を呼びかけるため、彼女が次の時代を担うのではないかと考えられていた。教主の娘がその教えを仰ぎ求め、二人を手伝ってきたことは真如苑の教徒にはよく知られている。信者は、教主の霊的決定による伊藤真聰の教団継承を当然のこととして受け止め、「継主」となった指導者、伊藤真聰を守るよう団結しているという印象を受ける。

4. 真如苑の中央カリスマ・カリスマ的組織

4-1. 導き系統組織

真如苑における「経親」制度は、集権制と集団結束を強化する重要な制度である。すべての入信は導き親である経親の指導を受け続け、他の人を信仰に導くと今度は自分が導きの親になる。その過程から生じた信者の上下関係をそのまま組織に組み込んで維持するというシステムになっている。この仕組みは同教団の組織と信者関係の基盤であり、組織そのものに教団の中央カリスマ的性質が顕著に表れている。さらに「経親」のメカニズムの連続性と安定性は、実践活動そのものなかで強化されていく。信者に対する日々の実践修行の一つに、「お助け」（おたすけ）と呼ばれるものがある。これは知人を教団に勧誘して、不幸な道から救うことを意味する。「お助け」によって新しい信者が獲得されると、その新信者は勧誘した信者の「導きの子」として教団組織に組み込まれ、勧誘した信者は「導き親」になる。この場合、導き親は導きの子の面倒をいつまでもみることが義務づけられ、「親子関係」を続けて保つことが必要になる。導きの子が信仰の面で正しく育ち、さらに自らも導きの子をもつと、この新信者は導き親からみて「導きの孫」にあたることになる。「導きの子」は、教義に関する疑問や、真如苑の法要についてわからないことがあると、常に自分の導き親に聞かなければならない。導きの子が経親や上の幹部に直接尋ねに行くことは通常ではない。しかし導き親が応答できない場合は、導きの子とともに（または導き親が許したうえで、導きの子が一人で直接）経親をたずねることになる。またそれが難題であり、経親も完全には答えられない場合、最終的に霊能者⁵⁾に接心を申し願うように勧めるのである。このように、教団は固定ネットワークを作って上下関係を強化し、許可なく上部に接触しないように配慮している。すなわち上から下への流れは指令・通告・指導のルートであり、下から上への流れは報告や質問のルートに限られるのである。真如苑の用語では、この上から下、下から上の流れを「上求菩提」（じょうぐぼだい）と呼び、その重要性をしきりに強調している。以上に述べたような系譜全体のことを真如苑では「所属」と呼び、教団の固定的な組織の構成原理になっている。

「経親」の服従関係によって連続性と安定性が確立され、そこから組織の中央のカリス

マ的性質が生み出されると考えられる。本来カリスマ関係は、カリスマという力が一人の指導者の手に握られていることによって成立するものだが、カリスマ的集団が拡大して組織化すると、必然的にカリスマ的力が、ある程度弟子や側近の者に分配されることになる (Etzioni 1961:10)。つまり、教祖や指導者一人の身に備わっていたカリスマという主体に、その客体であった側近の弟子や信者をも巻き込むことで、組織運営として必要なカリスマの客体化が進行する。こうして組織化された教団の成員は、カリスマ的な階層制に組み込まれる。上位の幹部になればなるほどカリスマ的指導者への接近が可能になり、自らもある程度のカリスマ的力を共有することになる。これによって、教団に参加する動機、満足感、熱意や競争心が保たれ、集団結束も強化されるのである。

真如苑の階層制は、修行度と霊位段階に基づく階層化（大乘、歓喜、大歓喜、霊能者の各階層；Nagai 1995:310）および「お救け」（布教）や実践の成果に応じた層化（経親、導き親）から成る。現在では、その上に「継主さま」と呼ばれる女性リーダーがいる。彼女はヒエラルヒーのトップとして、この階層システムの最高指導者として活動する。彼女は階層システムに属するのではなく、それを超越した至高者とされている。彼女のカリスマは組織そのものによって中央から与えられた形式的な力であり、彼女は中央のカリスマ的な組織のリーダーである。これは真如苑の重要な特徴であり、この中央カリスマのありかたは、同教団組織の代表的な要素であると考えられる。

4-2. 霊能者組織

真如苑の組織の仕組みのなかで、リーダーのカリスマを支持することに大きく寄与している重要な要素は、霊能者からなる霊能組織である。現在約 1600 人の霊能者（そのうちの 7 割が女性）が活動している（2011.12.22 のインタビューより）。真如苑の最大の特徴は、霊能者による接心修行である。この接心とは、信者と霊能者が一対一で対座して行なう修行のことで、そこに現れる力のことを真如苑では霊能と呼ぶ。この霊能こそが他人を、また自己を悟りの境地に導く力であるとされている。真如苑にとって、霊能および霊能者は教団の核心である。彼らは指導者層ではなく、教団信者全体を覆う精神的世界を作り上げる存在である。生活の全面にわたる信仰指導は、経親だけではなく、霊能者による「接心」の指導においても行われる。親子の連鎖からなる結束に対して霊能者による接心は教団構成員全体の意識的結束感を生む。つまり教祖・女性指導者が組織全体を超越したトップであるという認識の深化を形成させるのである。

真如苑の霊能者集団、すなわち霊位獲得と霊位向上を目指している信者のあいだには、目にみえないが、きわめて固い結束を保つ霊能組織が結成されている。この霊能組織は、信者同士にしか実感できない排他的な集団である。そしてこの霊能組織のリーダーとして、また集団的霊能力の源泉として、真如霊界の主人公である伊藤夫妻と両童子（伊藤夫婦の亡き長男と次男）が存在し、このことは信者たちにとっては絶対的な事実である。そして経親組織がおおむね俗の組織と言えるのに対し、霊能組織は聖の組織とみること

ができる。真如苑にとって、このみえない霊能組織こそが教団の生命でありエネルギーの源泉なのである。

5. 信仰教団に内在している霊能者組織の機能

多くの信者が認めているように、真如苑のもっとも大きな魅力は「接心修行」にある。真如苑の信者は接心修行を定期的に受け、そこで授かった霊言にしたがって、教えの実践に励み、自己の弱点の反省と改善に努めるのである。このような神秘の直接顕現の儀礼は、信者にとって日常の共同生活の特定の悩みの解決のために行われる。それと同時に信者が接心の魅力的な神秘を直接に体感ができるので、ある程度自己変革ができるようになる。この実践的な側面が接心修行の一環である。霊言を受けて実践する繰り返しの度合いが修行度のバロメーターとなる。こうした修行過程を初めから終わりまで通すことによって、因縁が切れ、徳が積まれ、個々に内在する仏性がゆっくり発現し、さらに霊位が高まるものと教えられている。したがって真如苑の信者にとって、接心とは単なる魅力的な儀礼というより、日々の生活や教えの実践を方向づけるきわめて重要な指針である。この接心こそが、真如苑における救いの真髄であり、ときには形式的な教義や崇拜対象より重要なものとしてとらえられることもある。

接心によって、霊能者の教えが道徳的なものとして心に組み込まれて、倫理的な救いとして信者の生活の奥深くまで浸透しているのである。このようにして霊能者は一つのモラリティを共有する信仰教団の形式に大きく貢献している。接心において霊能者は、教団の教えを明確にする役割を担い、布教の論理はわかりやすく示したり、信者の悩みを解決したりというように、霊的なコミュニケーションを通して援助を行う。さまざまな方法を多様に使い分けて、最終的には信者たちを教団の提示する理念へと導く専門家である。

ここで重要なことは信者にとって接心が非常に有効なカウンセリングとなっていることである。だからこそ接心は信者から絶大な支持を得ている。その点からみれば、霊能者と信者の関係はカウンセラーとクライアントのような関係であり、その関係が果たす機能はカウンセリングのそれと似ている。カウンセリングとは、相手の話をゆっくり聞くことで、精神的・肉体的な問題に対して、適切なアドバイスを与える方法である。不満、不安、苦痛、悩み、痛み、愚痴などを訴えてくる相手の話を聞き、相手が自分自身で問題を解決できるように、心の持ち方や考え方などをアドバイスするのである（辻村、1996）。接心にはその要素が見事に実現されている。たとえば、家庭の不和という悩みがあったとすると、信者は接心の場でそれを霊能者に伝える。霊能者が霊界にたずねて、その結果を伝える。不和の原因として、霊的な障害や心の持ち方を語り、精進のしかたなどをアドバイスするのである。このように機能としてはカウンセリングによく似ている。接心は宗教という価値基盤をもつだけに説得力があり、信者にとって納得しやすい。

さらにアドバイスは細かいところにも及び、具体的であるから、心理的な迷いが生じにくい。それだけに積極的に受け止められ、信念を持って行動するだけで自己変革が可能になるともいえる。信者は真如苑の接心により安心を得るが、接心はより効果の高いカウンセリング機能も発揮する。つまり助言を受けて、それによって効果を感じ、高い効果から安心を得るという繰り返しによって信仰が高まる、というメカニズムである。

現代の‘無縁社会’（全日本冠婚葬祭互助協会 2012）のなかで、真如苑の信者は人生に関わる判断をもっとも信用できる「接心」に任せている。信者が自己決定するとき、接心は適切な途を指し示してくる。そこには先見性があり、信者は自らがその存在を信じている霊界から霊言を受けることで正しい道へと導かれ、苦難を解決して平穏な生活ができると説かれる。つまり霊能者の援助によって、自分の心にある真実を理解するのであり、わからないときには霊能者の助けを得て理解できるようになる。次第に明確なアイデンティティをもてるようになり、それによって相手に接することができるようになるとされる。特に実践活動によって、信者は他者に愛や善意によるケアを与え、自己責任をもてるようになる。自己確認と相互確認、友愛と互惠関係が同時に獲得され、豊かな人間関係が可能となる。それによって教団の外の一般的社会で自分が果たすべき役割が示させる。こうして信者一人一人のアイデンティティが確立されるのである (Cavaliere 2015:223-31)。現在、特に若者にとって、アイデンティティの確立が大きな問題であることは、社会学者によってしばしば指摘されている (Hommerich 2017:72-96)。真如苑は他の宗教教団と比べ、若者数が非常に多く、青年会、青年活動の占める比重は大きい (Cavaliere 2015:76-80)。

真如霊能に基く相談機能は、真如苑の一つの大きな魅力的な要素である。その上、同教団は固定的で俗的な「経親」と、聖的な「霊能者」の組織に基づいているため、正確に一人一人の責任と役割が定められている。またそれによって一人一人のアイデンティティが認められるのである。信者が自分自身に対してアイデンティティを持ちうるため、他者との温かい人間的な交流が得られる。真如苑はこうして信者のアイデンティティの確立に非常に深い影響を与えている。

6. 経親組織と霊能者組織に基づくリーダーシップ

6-1. 経親の権力と霊能者の権力とは？

真如苑におけるカリスマとは、教団に内在している「導き」系統に基づく「経親組織」と霊能者による道徳的関与であることは、前節まで概観した通りである。しかし経親におけるカリスマ、権力は、霊能者のそれと同じものではない。評価、威信、儀礼的象徴の操作（たとえば経親における日常生活の実践方法や上下関係の集権化と集団結束）と、受容、肯定的反応の操作（霊能者による「接心」における信仰指導）とは異なるものである。組織の服従関係構造の特質に関して、要求されるカリスマ性と、権力の量は重要な決定

因となる (Etzioni 1961:303-4)。カリスマの一つの根源的機能は、そのコンプライアンス (服従関係) の主要な源泉となっていることである (*ibid.* :3-4)。とくに象徴的な満足度を満たす行動として活動への参加があり、参加への積極性がたかまることによって強い帰属感をつくりあげる。真如苑の信者にとって経親組織は上下のフォーマルな固定関係であり、日常生活における実践活動などを統制する。経親組織は上層グループとして下層グループ (導きの子、導きの孫) の統制によって影響を与え、教団の集権制と集団結束を強化している。それとともに霊能者が儀式、道徳関与、表出的活動を統制する。

組織の点からみれば、この二種の権力は象徴的であり、とくに宗教的意義を認められ上下の関係によってコントロールされている。それは同一のカテゴリの一つ、道徳的関与とみられる (*ibid.*)。エツィオーニによると、道徳的関与には、純粋な道徳的関与と社会的な道徳的関与が存在する (*ibid.* :10-11)。前者は規範の内面化と権威との同一化を基盤にし、後者は集団とその成員の圧力とに対する心理的要因に基づいている。

このような思考に関して、霊能者組織は純粋な道徳的関与に基づき、経親組織が社会的な道徳的関与に基づいていると言える。教団では霊能者と経親のそれぞれ二つのタイプの権力が共存している。一方は「霊的問題」をつかさどっている権力であり、他方は「現世的で外的な規律」をつかさどっている権力である。それによって、それぞれの統制する活動には表出的活動 (教団では一般的に信者の道徳的関与を要求する活動) と道具的活動 (フォーマルな機能によって道徳的忠誠を創出・維持する役割) という活動がある。それぞれの活動は、霊能者組織と導き親組織の権力構造の形態はそれぞれの権力の源泉であり、それに関する帰属感、活動の種類に基づいている。次節では、それぞれの組織がどのような目標のために仕えられている、どのような役割を果たしているか、どのような機能をもっているか検討してみたい。

6-2. 経親組織と霊能者組織の目標、権力、役割

真如苑のような宗教集団は道徳的、宗教的な活動に基づき、同じ目標の内部でも特定のタイプの帰属感、構成要素に対する力点を必要とする。真如苑が、それを達成するためには、異質な下位目的や課題を追わなければならない。したがって一つの組織に二つ以上の目標を割り当てることがあり、掲げられた目標と果たされた任務との間には相違がある。異なった任務の構造が、異なった組織の下位単位の内部に発達し、それぞれ同時に独立して作用する。経親と霊能者は自分の義務に対する道徳的関与、つまり彼らの果たしている役割の内在的な本質と、威信、尊敬のような象徴的報酬から満足を得る。

6-3. 霊能者と経親における相互関係

信者の日常的な指導は、導き親、または経親によって行われている。親は「お助け」に励み、導きの子を教化育成する集団の縦軸となる。同時に教徒は「霊言」による霊能指導に取り込み、日々「三つの行み」を指導されている。実践活動と接心修業はどちら

ももっとも重要な基盤である。しかし、信者にとって基本的な目標は、霊能者のように向上を果たすことである。菩薩心の向上を目指す接心修業はより重要な目的である。したがって霊的問題をつかさどっている霊能者は親より権威のあるものとされている。

同一の人は、ある部下に対して職務上の権力を持ち、他の部下に対しても個人的権力を持ちうる (Etzioni 1961:14-16)。確かに、親として導き子を指導する霊能者は多く、霊能者として霊能指導する経親も多い。二人とも専門家としての（つまり一種類の活動をあずかる）位置にあるが、多く役割においても一人の行為者に結合しうる。指導活動、道具的活動、目的が、真如苑の教義によってはっきり決定されているので、親や霊能者という二つの役割を果たしていることは矛盾ではない。実際、親の指導活動と霊能者の霊能指導の間には相互作用の性質がある。カリスマ的に霊能者が上級レベルに所属し、下級参加者（親、信者など）に対して監督としての義務を果たすことは認められている。もちろん組織の効果的なヒエラルヒーとは目標と手段が適合的であるようなヒエラルヒーである。親の目標が霊能者のそれより副次的であることではない。菩薩心の向上と言う目標は世俗社会のなかで向上を志す目標と同一であり、霊位向上は現世利益と同一とされる。霊能者組織と経親組織の関係は、協力的で、フォーマルな選任に基づき、教団を維持する決定要因である。

6-4. 霊能者と経親のリーダーシップ

真如苑の組織は、二つの下位構造に分割されている。一つめの構造は、霊能の専門家としての霊能者が、教祖・継主さまに代表される最上部のカリスマを共有し、保有している。もう一つの構造は、管理者としての導き親組織が、功利的組織のように、上下関係を運営している。

霊能のような非合理的な要素は、単に最上部に位置しているだけではなく、霊能者たちによって全体の構造のかなり部分を覆っている。合理的な部分は、定義された範囲と重要性をもっている導き系統である下位単位に構造されている。導き親組織は、管理的（手段的）単位を持っている効率的な組織である。そしてより直接的に教団の目的に仕え、霊能者の組織に従属している有効な組織である。導き親によって、彼ら・彼女たち自身の強い帰依をつくりあげ、組織の目標に対する意欲を同上させている。彼ら・彼女たちのリーダーシップが導き子たちの表出的活動（集会、法要、接心への出席）と、道具的な活動（布教活動、日常実践）に働きかけをし、コントロールしている。

霊能者は、トップレベルにある継主さまのような地位よりも、下層の地位にある。霊能者が専門家として、霊問題についての目的の決定をし、霊能によって直接目的に関係する活動が行われる。この専門家による決定のタイプには、カウンセリングによる悩みの解決、導き親に何を教えるか明確に知らせる、霊能向上のためにどのようなやり方が必要であるか教える、の三つのタイプがある。これらの決定は霊能においてされているので、合理的根拠に基づいていない場合がかなり多い。導き親（多くの場合、霊能者の

役割と導き親の役割が一人の行為者に担なわって結合しうる)と、信者たちによる専門家の決定の受容は、原則として、非合理的であるということである。霊能者のアドバイス、指導、教育をうけるにあたって、合理的根拠をもたない。導き親や信者には専門家の活動を判断するのに必要な知識と能力が欠けているからである。霊能あるいは教育に関する一般的信仰や、俗世間における専門家である霊能者の評判、さらに専門家のカリスマなどに基づいて受け入れるほかないのである。

霊能者のリーダーシップは、導き親や信者の道徳的関与を必要とするような立場においては、機能的である。霊能者のリーダーシップは教団の目的に関する決定を下すことが可能で、そこから表出的活動が統制される立場である。そして真如苑における二つの組織はそれぞれのリーダーシップの関係構造において異なっている。すなわち、霊能者は純規範的・精神的な関係に、導き親は社会的・道徳な関係に依存している。

7. 真如苑の女性指導者のリーダーシップ

エツィオーニの組織論から分析すると、真如苑においてカリスマが必要とされるカテゴリーは、次の三つに分類される。最上部に位置する功利的組織（指導者とそれを支える管理者など）、純規範的な組織（霊能者による専門的組織という中間集団）、そして規範的組織（導き親系統）である。教団のカリスマはこれらのカテゴリーに集中している。さらに真如苑の組織においては、一人の女性リーダーが代表として最上部に位置している。

リーダーである「継主さま」は、教義と精神的な目標の保管者として非合理的な要素を体現する。その下に位置する功利的組織は、専門的な任務と上級レベルの管理を行う専門家によって占められており、そのような合理的な要素が組織の母体の上につけ加えられている。彼らは主として教義の解釈・儀式・礼式など、表出的な活動の決定や道具的な活動に関与している。この点を考慮すると、「継主さま」のカリスマは純粋な、つまりウェーバー(1904-5)が述べる本来の指導者の超自然的・超人間のカリスマではなく、世襲によって後継者となったことで獲得された世襲的なカリスマと言える。

真如苑の組織は、その生成・発展の各段階で、そのカリスマ構造を変化させていった。最初の時期には、純粋なカリスマが存在し、二代目指導者の時期には、日常化されたカリスマがそれにとって代わっていった。だが、第二世代において生じたカリスマの日常化によって、カリスマの強度が減少したわけではなく、再分配されていったのである。第一世代指導者のカリスマ的な最高位は、のちに上級・中間的地位の専門化によりとって代われ、教団はそのカリスマを維持しつづけた。このようにカリスマが日常化された第二世代においては、リーダーはカリスマの保持者というよりも、より機能的な役割を担うことになる。教団組織は、日常化によって陥りがちな保守主義、あるいは墮落の危険に備えるため、信者に対し道徳的帰依の強化と革新に努めるよう指導した。そうすることによって、信仰を再生する必要があると説いたのである。カリスマ的な組織にお

ける指導者層は、教団組織自体に対する信者の道徳的帰依をつくり出すべく、指導者とそれを支える最上部に一体感を生み出そうとしている。霊能者と導き親が接心の実践や緊密な上下関係によって、常に信者と接触し、強い道徳的な帰依をつくる一方、他方では、指導者は信者たちと接触する機会こそ少ないものの、大きな意味をもつ儀式行為（法要など）を通して、信者への道徳的関与を強化する。

つまるところ、「継主さま」のリーダーシップは、二種類のカリスマに基づいている。一つは、教義を維持している指導者に対する、信者の帰依感から生じるカリスマである。もう一つは、組織に対する信者たちの忠誠、組織の規範の受容、組織の集団的志向などから成る、組織的・中央カリスマである。

8. おわりに

現在の真如苑におけるカリスマは、カリスマ的女性指導者そのものではなく、カリスマ関係や特殊なヒエラルヒー的指導者系列、カリスマ的組織仕組みである。真如苑のカリスマの基盤は、教団に内在している規範的な組織にあると結論づけられるであろう。固定的な組織（経親）と教団における接心、相談接心、体験談、集会における苦難と救いの物語、集会指導者の教え、経親の指導者、経親の導き、指導者と信者の関係とを合わせ持つ真如苑は、これらに基づいて教団運営を成功させているカリスマ的な宗教集団であると言えよう。ここでは、最高指導者「継主さま」と呼ばれる現在の女性リーダーが階層システムに属するのではなく、それを超越する至高者とされている。この点で真如苑は、中央カリスマ・カリスマ的組織である宗教団体の代表と言えるだろう。

伊藤真聡という現在の女性指導者、信徒数の増加、霊能者組織と経親組織、さらに女性の重要性といった点から、真如苑は新宗教教団の中でも非常に興味深い存在であると考えられる。

注

- 1) 「カリスマ」に関する先行研究をここで詳細に論じることはしないが、マックスウェーバーのいう非日常的なものとみなされた（元来は呪術的条件に基づくものとみなされた）ある人物の資質という説明に則る（ウェーバー 1921-22=1970:70）。また、その妥当性を保証するのは「証しによって…保証された…被支配者による自由な承認」（*ibid.* : 71）である。
- 2) この点は「カリスマの日常化」問題と当然関わる。ウェーバーは「(カリスマ的) 支配が継続して存在し続けるときは、…支配関係は日常化してゆく傾向をもつ」と述べる（ウェーバー 1921-22 = 1960:52）。これは秩序の伝統主義化、カリスマ的行政幹部の引受け、カリスマの意味の変化によって生じる。
- 3) 「導き」は真如苑に入っていない人を入信させる「導く」ことをいう。

- 4) 「経親」とは、経の長を指すことばである。所属が増えると経親として独立する。これを経立てという。
- 5) 真如苑の霊能者は、接心修行を通して自分の心の曇を磨いていくことにより霊位が向上し、ついには円満な指導者たる霊能者になる。

参考文献

- Adams, Robert (1990), *Self-Help, Social Work and Empowerment*, MacMillan
- Bendix, R.(1960), *Max Weber: an intellectual portrait*, Heinemann
- 文化庁文化部宗務課 (2017), 「宗教年鑑平成28年版」、東京：文化庁編
- Cavaliere, Paola (2015), *Promising Practices: Women Volunteers in Contemporary Japanese religious civil society*, Leiden: Brill
- Durkheim, Emile (1930), *De la division du travail social*, 4th ed. Paris: P. U. F.. [田原音和訳, 1971, 『社会分業論』青木書店]
- Etzioni, Amitai (1961), *A Comparative Analysis of Complex Organizations*, The Free Press Glencoe
- Etzioni, Amitai (1964), *Modern Organizations*, Englewood Cliffs: N.J. Prentice Hall Inc. [渡瀬浩訳、1967, 『現在組織論』至誠堂]
- ひろたみを (1990) 『ルポルタージュ真如苑——その現代性と革新性をさぐる』、知人間
- Hommerich, Carola (2017) ‘Anxious, stressed, and yet satisfied? The puzzle of subjective well-being among young adults in Japan’, in B. Holtus and W. Manzenreiter (eds.) *Life Course, Happiness and Well-being in Japan*, London: Routledge, pp.72-96
- 伊藤真乗 (1957), 『一如の道』真如苑教学部
- 伊藤真乗 (1985), 『藤の花房』、真如苑教学部
- 森岡清美 (1981), 「宗教組織—現代日本における土着宗教の組織形態—」、組織学会編『組織科学』15-1:19-27
- Nagai, Mikiko (1995), ‘Magic and Self-Cultivation in a New Religion: The case of Shinnyoen’, *Japanese Journal of Religious Studies*, 22(3-4):301-20
- 櫻井秀則 (1992), 『かつぼう着の法母』下・中・上、原生林
- 島菌進編 (2002), 『つながりの中の癒し—セラピー文化の展開』専修大学出版局
- 社団法人全日本冠婚葬祭互助協会 (2012), 『無縁社会から有縁社会へ』、水曜社
- 辻村英夫、又吉正治 (1996), 『カウンセリングと人間関係』学分社
- ウェーバー、マックス (1904-5=1989), 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』、大塚久雄訳、岩波 文庫
- ウェーバー、マックス (1921-22=1960), 『経済と社会—支配の社会学』(世良晃志郎訳)、創文社
- ウェーバー、マックス (1921-22=1970), 『経済と社会—支配の諸類型』(世良晃志郎訳)、

創文社

Weber, Max (1921-2=1976), *The Protestant Ethic and the Spirit of Capitalism*, 2nd edn. With an introduction by A. Giddens. London: Allen & Unwin

Female leadership in Japanese contemporary religious organizations: The case of Shinnyoen

Paola CAVALIERE

Women's rise to formal leadership roles in Japanese new religions has attracted considerable scholarly attention. However, few attempts have been made to examine women's formal religious leadership in contemporary settings, and little has been said about how their authority is constructed, supported, and legitimated within their organization. This paper examines the case of Shinnyoen and her current female leader, Itō Shinsō. The theoretical framework adopted for the examination draws on Weber's definition of charisma and its routinization, and the organizational theory by Etzioni. The analysis shows that Itō Shinsō's effectiveness in religious leadership embodies the internal socio-cultural and normative organizational characteristic of the group. In particular, the level of compliance in highly regulated top-down and bottom-up social relationships as well as moral commitment reveal the essential relational property of Itō Shinsō's charismatic leadership.